
◎一般質問

○議長（藤井 要君） 日程第1、昨日に引き続き一般質問を行います。

質問の通告がありますので、発言を許します。

◇ 渡 辺 文 彦 君

○議長（藤井 要君） 通告順位6番、渡辺文彦君。

（6番 渡辺文彦君 登壇）

○6番（渡辺文彦君） それでは通告に従いまして壇上より一般質問させていただきます。

この度の私の質問は2点ございます。1点目は、第2期総合戦略についてであります。

2点目は、温泉施設、依田之庄の改良についてであります。

1点目については、第1期総合戦略の終了に伴い、第2期の5年間の新たな戦略において、2060年に町の人口を3,300人にしたいという目標が示され、それに関わる施策が示されました。私はこれらの対応にて2060年に3,300人が維持され、さらにその後も町が持続的に維持される可能性があるかを問うことでもあります。7年ほど前、元総務大臣でありました、増田寛也氏が地方消滅という本を出し、当時多くの自治体にショックを与えました。そこで国を始め、多くの自治体において総合戦略を立て、持続的なまちづくりの方策を探ってまいりました。5年経た今の結果、いかがだったのでしょうか。結果は、多くの方が認めるように、一向に改善されてないように思います。

第1期の戦略において思うような成果が得られなかったことで、第2期の戦略となったわけですが、今回の戦略において、本当に持続的な町が継続・継承できるのか、その辺を問うてみたいと思うわけであります。

2点目についてですけれども、2点目はこの度、大沢に依田之庄として温泉施設が開業される方向で進んでおります。度々の開業延期がありました。また、今度開業の方向にむかって、料金の見直しも考えられております。この施設は元々、道の駅パーク構想の中の一部の施設であります。私は、パーク構想作成時、地域の住民の意見が反映されていないことを問題視し、議会においても度々そのことを問うてきました。この度、当時の計画とは若干異なりながらも、ほぼ体制が整い、開業へとの方向が示され、そこで地域の住民からの利用料金の見直しの声も上がって・・・、その声に答え、料金の見直しをもって、開業したいという方向であります。パーク構想を実現し、地域活性化に資するには地域住民の

協力・参加がなくては不可能であるというのが私の従来からの考えであります。

この度、地域の方々から声があがったことを歓迎するとともに、その一方で、今後、継続的に、地域の方々の参加支援を得るためには、継続的にどのようなことが求められているのかを、町に考えを聞いてみたいと思うわけであります。

私の質問は以上でございます。壇上からの質問をこれにて終わります。

(町長 長嶋精一君 登壇)

○町長（長嶋精一君） 渡辺議員からのご質問でございます。大きな1つ、第2期総合戦略について、2060年に町の人口は3,300人規模に想定する戦略で、各種施策が考えられているが、この戦略で、町の持続性は担保されるかについて、町の考え方を問うということでございます。そのうちの1つであります。2060年時における町の人口、構成比、及び産業構成比はどのようになると考えているのかというご質問でございます。

お答えします。2060年時における人口構成比は、0歳から14歳が12.75%、15歳から64歳が54.28%、65歳以上が32.97%となります。産業構成比は、将来推計がとれておりませんが、現在、全体の50%を占める卸売業・小売業、宿泊業・飲食サービス業が、減少していくことが予想されることとなっており、このまま何もしなければ壊滅的な数字となってしまいます。地域の持続を目指すには、広域のエリアマネジメントが必要になり、近隣市町との連携協力がますます重要になって来ると考えております。

大きな1つの2つ目のご質問でございます。第2期、5年間の重点施策が7つ示されているが、これらの施策で目標達成できると考えているのかというご質問でございます。

お答えします。先日の議会全員協議会にて説明をさせていただきました第2期総合戦略ですが、「松崎に暮らす人の喜びが多くの人を誘(いざな)うまちづくり」「伝統と現代が調和した暮らしのあるまち松崎」を継続して、基本的理念、テーマとさせていただきました。その上で、4つの戦略の柱を掲げ、松崎町の独自性を考え、具体的に7つの重点取組施策を設定させていただいたものでございます。いずれの施策も、町が直面する課題解決に向けて、大変重要な取組であり、目標達成に向かって全力で努力してまいります。

大きな1つの3つ目のご質問でございます。出生率が1.6から1.8に回復し、社会移動が均衡することでの想定であるが、その根拠はどうか、という質問でございます。

お答えします。合計特殊出生率につきましては、増加に転じるためには2.1を超えなければならず、現在の当町の状況においては現実的な数字ではありません。しかしながら、このまま何もしなければ、人口減少に歯止めがかからないため、何とか1.8への回復を目

指しつつ、社会移動の均衡により、減少率を緩やかにすることを目指してまいります。

次に大きな1つ目の4つ、2060年に人口3,300人とした場合、将来的に町の持続性は担保できると考えるのか、ということでございます。

お答えします。人口減少による弊害は、大きいものと想像がつきますが、全国的には、現在最小の町の人口は1,000人強のところもあり、人口規模にあった町としての最適な行政運営を行うことで、持続性は担保できると考えております。単に数字のみを追うのではなく、そこに住まう人の満足度が重要であると考えております。

次は大きな2つ目でございます。大沢温泉依田之庄の開業にあたってということでございます。再々の開業延期があり、その都度、追加的な工事も加わり、12月開業時には、利用料金の見直しも考えられているが、最近の観光状況を考えると、安定的な経営は困難と考える。この施設の運営により、期待する成果について町の考え方を聞きたいという大きな質問の中の1つ目、絹屋を休憩場として、整備するとの事だが、予定の予算額で足りるのかという事でございます。

お答えします。旧依田邸の温泉施設の整備活用にあたり、地域住民との協議を重ねる中で、利用者の満足度を上げるため、休憩場所の整備が必要とのことから、絹屋を整備することとなりました。今回の絹屋の修繕につきましては、1階部分のみを休憩室として活用する計画であります。内容としましては、内装や、雨漏り箇所の補修、トイレ等の浄化槽への接続工事などとなっておりますので、計上した予算額内で収まると見積もっております。

大沢温泉依田之庄の2つ目のご質問でございます。施設の運営にあたり根本的に問われるのは料金そのものではなく、サービスを含めた施設の内容であるとする。今回料金見直しを考えているが、健全経営は可能と考えるのかというご質問でございます。

お答えします。現在の施設整備状況や地域住民の方々の要望により入浴料金の改定をすることとなりました。大沢地区全体での活性化を地域住民とともに図り、リピーターを増やすための努力を続け、3年後には、収支黒字を目指してまいります。

大沢温泉依田之庄の3つ目の質問でございます。今後施設の運営にあたり、大沢地区の方々の協力を得て進めていくとのことだが、どのような形で、関わっていただくつもりか。また、地域の協力を地域の活性化につなげるにはどのような事が求められるのか、を聞きたいということでございます。

お答えします。まずは、施設が地域の方々に愛されることが必要であります。地元の

方々は、これまでも植え込みの刈り込みや、絹屋の清掃など、多くのボランティア活動への協力をいただいております。今後も、施設の周辺地域の保全活動などに関わっていただく予定でございます。地域の協力により、コミュニティの活性化と大沢・明伏エリア全体の活性化を繋げるために、官民協働で力を合わせ、知恵を出し、活動していくことを進めてまいります。

以上で、渡辺議員からの質問にお答えしました。

○6番（渡辺文彦君） 一問一答でお願いします。

○議長（藤井 要君） 許可します。

○6番（渡辺文彦君） それでは通告順に質問したいと思いますけれども、同じような内容で・・・、内容が散らばってますもので若干、前後をしながら、重複する所もあると思えますけれどもよろしくお願いたします。

まず、基本的に最初に確認したいんですけれども、1期の総合戦略が終わったわけですが、1期の総合戦略の評価を改めてお伺いしたいですけれども。で、その評価に伴ってですね、2期の重点施策が7つほど挙げられてるんですけれども、その辺の絡みでもって、2期、本当にどこに力を入れなきゃならないのか、その辺を確認したいと思います。よろしくお願いたします。

○企画観光課長（深澤準弥君） 1期の総合戦略につきましては、国の方も最初の重点項目は、人口減少を抑えるということになっておりました。ただ今回第2期の総合戦略を策定するにあたって、国の方も日本全国人口の減少が歯止めがきかないところを、現状把握しながら方向性を転換したような形になっております。第1期の作成の時には、先ほども渡辺議員からも、お話がありましたように、増田レポートの中で、地方消滅という衝撃的な言葉が出た事が1つのきっかけとなり、地方創生ということが、動き出したような状況でございます。ご多分に漏れず、松崎町においても地方の一つでありまして、人口減少は急激に進んでいた状況でございますので、第1期の時に策定した総合戦略においては何とか人口の方をキープしたいというような政策を、国の方からの指示を受け作った次第でございます。そこに対して今度は第2期の時点においては、人口の減少を緩やかにするという国の方の指示があるものですから、それを踏まえた上で人口減少率の高い地方の過疎地域である当町においては、まずは松崎に暮らす人の喜びが多くの人々を誘う街づくりといったようなことで、生業と合わせた中でのまちづくりを進めていくという形になってございます。先ほども、おっしゃっていただいた通り、第1期の目標があまりにも、ち

よっと、人口については、高い目標でございましたので、人口については減少を止めることは、なかなかできていないのが、現状でございます。その中で、今回第2期で重点取り組み施策の中で、7つの施策を上げさせて頂いております。まずは、桜葉産業の関係、そしてあと、ナマコ壁、棚田の保全活用、道の駅旧依田邸の整備活用、ふるさと納税の推進、診療所の整備、地域公共交通の充実、移住定住対策の充実といった7つの項目を挙げさせて頂いた中で、地域の人たちの満足度を上げ、そういった形による地域の持続可能性を目指すといった計画とさせて頂いております。

○6番（渡辺文彦君） 施策の、第1期の反省を踏まえ、第2期の総合戦略の中で重点施策7つ示されているわけですが、この方向性は基本的には間違っていないと思うんですね。ただ問題は、それがどれだけ実現可能性なのかっていう事の方が問題なのかと思っています。1期の時に掲げた目標も、それなりに効果があるだろうと予測のもと、立てられているはずですが、ところが、思うような成果が得られなかったわけです。第2期においても、1つ目標に対しての施策が当然あるわけですが、それが本当に実行されて、そういう方向性に向かっていくのだろうと、僕は考えます。そういう意味で、これらの施策を担保するためには、少なくとも何が必要かってことを考えなければいけないわけですね、おそらく・・・全部触れると大変ですから・・・、ちなみに桜葉振興を1つにとって考えてみたいと思いますけれども、桜葉振興ということ、担い手を増やすと書いてあるわけですが、担い手を実際どうやって増やすのか、これは第1期でも、また町長は現役議員の時ですら、このことはずっと語られてきたわけですが、未だ改善されていないわけです。これを、どうやって改善していくのか、その具体的な道筋をまず、示していただければと思いますけれども・・・。

○町長（長嶋精一君） 渡辺議員がおっしゃる通り、私は議員の時に渡辺議員等とよく話をして桜葉をこれからやろうじゃないかということで、話をした記憶が鮮明に残っております。桜葉については、いろいろございましたけれども、当初からやっていた桜葉の専門会社が倒産して、それから東京の方の会社が入ってきて、おやりになったと・・・それから、また地元の会社が変わったという、そういう変遷がありまして・・・、なかなか難しいビジネスというか法人経営については、非常に難しいということが分かったわけですが、ただ、全体的に見ますと、あくまでも需要が旺盛であって、供給力が不足してるということには変わらない訳ですね。商売で失敗するのは、需要予測を失敗して供給力を高め、設備投資をして借入金を増やして、それで借入金過多ということで、なかなかうまくいかな

い、失敗するということが多いわけですが、需要は多くて、供給が少ないというこの構図はですね・・・、ここはビジネスチャンスだと私は思っております。それを、議員の時から、よく話し合いをいたしました。で、じゃあ、具体的にどうすればいいのかということになります、相当長い期間この桜葉は、減少傾向にあったわけですね。平成4年の頃をピークとしますと、ずっと減少傾向になっているわけですね。従って、それをですね、いきなり、増やすということは、非常に難しいわけですが・・・、それこそ一歩として、松崎高校東部支援学校の生徒さんと協力しながら、松崎高校のすぐ下に、畑を設けてですね、実行したと。これは、一歩だと思います。そして、これからのコロナ禍において、都会から地方へ移り住んでくるという方々も、そういうニーズがあります。それは、ワーケーションとか、いろんなテレワークとか、そういった面もあります。そればかりじゃなくて、このものづくり・・・、ものづくりというか、農業、特に桜葉がこういった形できるとりくめる要素が多いにあるのではないかと、私は思っております。ですから、田んぼや畑や耕作放棄地があると、空き屋もあると、そういう空き家対策、耕作放棄地対策、移住促進・・・、こういったことをですね、絡めて、総合的にやってまいりたいと。それによって、桜葉の供給者を増やしていくと、いうことを考えております。桜葉だけですと、なかなか生活ができないということになるかと思えます。ただし、桜葉専門でやってもですね、かなり生活ができるということもつかんでおります。桜葉が例えば、5月から10月、半年ぐらいですが、それ以外の月を、なんで、どうやって生活するのかということ、松崎町には、いろんなその農業生産物があります。大きくはやっていませんけれども、多品種少量ということが、また、松崎の売りではないかと、私は思っておりますので、いろんなことをですね、絡めて、この桜葉を推進してまいりたいと・・・、行き着くところは、中国からの輸入ではなくて・・・。

○議長（藤井 要君） 町長、簡潔に・・・。

○町長（長嶋精一君） 終わります。松崎、それと西伊豆、南伊豆、伊豆地域の産品でこれから推進をして参りたいなど、いうふうに思っております。

以上です。長くなりまして・・・。

○産業建設課長（新田徳彦君） ただいま、桜葉振興の担い手というご質問がでましたので、私の方から、若干、補足をさせていただきたいなあと思います。ご承知の通り、桜葉振興に当たりましては、担い手の高齢化ですとか、ということで、かなり将来の担い手という観点からいきますと、不安な要素もありますけれども、先ほど、町長から申し上げま

した通りですね、東部特別支援学校の松崎分校の生徒さんの方にも、生産なんかにも加わってもらいまして、一緒に今、汗を流してやってもらって、関心を持ってもらおうということでやったりしております。また、今年から地域おこし協力隊のメンバーの1人にもですね、桜葉振興の方に携わってもらいまして、関心を持ってですね、本人も取り組んでやっていたらということ、まずは、そういった意味では関心をもってもらって、将来上手くいけば、当町の桜葉振興の担い手の一役に立っていただければなど、思っております。桜葉振興会の方でもですね、町から補助金を出して、桜葉生産の指導なんかも地元の農家さんに対してですね、やったりしておりますので、町といたしましては、こういった、担えるような条件をですね、整備しながらですね、桜葉振興につながるような形でもって行ければなど考えてるところでございます。

- 6番（渡辺文彦君） 先ほど、町長がおっしゃいましたように、桜葉は需要と供給から考えたら、圧倒的に供給が不足してるっていう非常に稀な・・・、おそらく商品じゃないかと僕は思っています。となると、普通に考えれば、そこに参入する方が多くあってもいいと僕は考えるわけですが、それが現実化していかない。それは何かっていうことだと思うわけです。地域から転出者があって・・・、都会から転入者がいないっていう・・・、地方から子供らが出ていく時に、言う言葉が仕事が無いからだとおっしゃるわけです。ところが、やり方によっては、十分、ビジネスになる産業が僕はあると考えているわけですが、それが地場産業として、育っていかない、それがなぜかということを経験的に聞いて対応していかなければ、難しいのかと僕は思っています。今、担い手の確保を支援学校とか高校生とかがっていうところに、もし持っていき、考えていくとするならば、それは、やはり、僕は、基本的には、大きな誤りだと、僕は思っています。関心を持っていただくことに対しては、反対する理由はないんですけども、やっぱり、子供たちが、本当に、そこに関わって、やっていけるっていうような体制を見せることから、もし・・・、やるならば、関わっていただくならば、桜葉産業でも十分、都会へ行かなくても、ここで飯が食えるよっていうことを、誰かが見せなければ、僕は、やっぱり若い人たちは、出て行ってしまふのかなと考えます。そういう意味で、もっともっと、同じ関心を持ってもらうにしても、定着できるような方向性の、その産業に参入してくれるような方向性の、具体的な施策を展開していただきたいと思っております。このことばっかやっていると、これだけで1時間終わってしまいますもので、基本的にですね、僕が1番問題にしたい所は、3,300人の人口で維持できるかってところが、1番の疑問符であるわけですが、先

ほど、今1,000人でもやっている町があると、1,000人以下でもやっている町があるとおっしゃっております。確かに、そうだと僕は、確かにそういう町があるのは分かるんですけども、我々の町が、今後6千から3千、3千からもっと下の2千とか千っていうところに、ソフトランディングして行くためには、何が必要かってということだと思っわけです。ね、ようは・・・。そのために、今やっ行って行かなければならない施策が、何かということだと思います。総合戦略のテーマに、松崎に暮らす人々の喜びが、多くの人々を誘う町づくりと、結局、今、松崎に暮らす、多くの方々が、ここで生活できないよっていう、喜びが満たされていないがために、多くの人々が転出してしまおうという、そういう流れ、とういうか、減少していくっていう、そういう流れになっているのかと思います。となると、ここで、暮らす方々の喜びというのは、何によって担保されるのか、その辺を考えなきゃならないと僕は考えます。企画観光課長にお伺いしたいんですけども、早川町あたりは、1,000人クラスの人口でやっているわけですけども、あの町の方々は、どんなことに対して町に誇りを持っているか。その辺をお伺いしたいと思います。

○企画観光課長（深澤準弥君） 早川町につきましては、それこそ千人強の自治体でございます。で、実際にあそこは、元々は、お寺を参る人たちの通過点で、そこに民宿がたくさんあって、当時それこそ3千とか4千とかの人口をキープしていた場所で、それが段々とそういう生活様式が変わっていくことによって、お寺を参る人たちが減っていく中で、どんどん通る人がいなくなり、民宿もなくなり、これといった当時は産業も特にはなかった状態だったそうです。今、千人強で、やっている中で、廃校を利用した地域のおばちゃんたちの食堂とか、あとは昔ながらのそういう古民家を活用した蕎麦屋さんを、やはりその地域の方々が連携して、やっているところが多くなってきています。あそこは、一応農協が結構、力を、地方創生に入れていまして、そことの連携を地域の人たちとやっているそうです。実際は、そういう昔は、お遍路さんじゃないですけど、そういう方々が宿泊をして成り立っていた所なんですけれど、今現在は、それがまったくない中で、いわゆる南アルプスという資源を活用した中で、実は美しい村連合の静岡県内、もう1つ川根本町というのがございます。そちらと早川町と南アルプスを共通にしたまちづくり、というのを進めておりまして、観光の町に少し変わってきております。今回、いろいろ静岡県ともめてはいますけれども、リニアモーターカーの工事の関係で、いわゆる工事に関わる人たちが、来るというリニアバブルというのを1つ目指していると、いったことを役場の方からちょっとお伺いしたことがあります。ただ、それは、あくまでも一過性のものであって、

まちづくりを進めるにあたって、やはりその住んでいる人たちがということで、今は地域の人達とやってるのは、やはり高齢化凄く進んでいる町ですので、その中でやっぱり人が来て、人と話をしたり地域の人同士でコミュニティをキープして行くということが、やはり、その地域のうれしさというか、そういう楽しさというか、ものになっているということは伺ってます。ただ、今後は、うちよりも早く千人を切るのは間違いないだろうと、ということで、やはり地域のさっき言った、川根本町とか近隣の市町との、あそこは県境で県を跨ぐんですけれども、そういう連携が、大きく必要になってくるのではないかと、いったことでまちづくりを進めると、というようなことをおっしゃっていました。

○6番（渡辺文彦君） 私は将来の町が千人になった時に、どんなふうにして維持できるかという不安があるものでね、参考でちょっとお伺いしたわけですがけれども。今やっぱり、そこに、いろんな事が考えられてるみたいですがけれども、基本的に地域を支えていく、地域が持続できるのには、そこに関わる地域の方々の大いなる活動というか活躍というか、それがあらんじじゃないかなと、僕は思っています。それが無くしてただ行政だけで旗振っても、なかなか、安定した地域づくりは、できないのかなというふうに思っています。そういう意味でね、松崎も地域の方々の活躍が今後おそらく町の持続のためには、うんと望まれるんだろうと思います。そういう中で、今回、この後で質問しますけども、大沢温泉に関して地域の方々が関心を持っていただいて、協力してくれるような、方向性が出てきました。私は、こういう方向性が出てくることが、今後のまちづくりにとって非常に大切な方向性だと考えております。こういう流れを今後、加速していくとか、まあ、加速まではできないにしても、やっぱり、それを徐々に、増やしていかなければ、いけないのかなと考えます。町の基幹産業は、元々、以前から観光業だとおっしゃっております。観光業もこのコロナも含めて、最近、大きく様変わりしたような雰囲気がございますけれども、私は以前、石川県の方の議員さんとお話する機会がありまして、その議員さんが、学生は修学旅行ですね、体験修学旅行みたいなのですかね、それを受け入れて、やっている町があって、そこが非常に活況だというお話を伺いました。今、教育旅行に対する需要が高まっているんですけれども、受け入れ先がなくて、どんどんどんどん縮小しているというような事を伺っております。松崎においても、三浦地区でもって、教育旅行の受け入れをされてきたわけですが、高齢化等においてだんだん規模が、縮小されているということを聞いております。だとするならば、ここにも地域の協力をもって・・・、一個人の経営ではなくて、松崎全体、総意の中でもって、その地域の子供らを受け入れ、教育、

その民宿、また観光業を成り立たせるという考え方があってもいいのかなど、僕は考えるわけです。今、教育旅行の事に関して触れたんですけれども、去年、私たちが研修に行った川場村というところがございます。道の駅でも有数なところでかなりのお客さんを集めているところですが、そこは世田谷区と協定を組んで学生の旅行を受け入れてると、その学生たちが、毎年来てくれる事によって、その学生たちが親の世代になってもまた地域に足を運んでくれるんだと、いうことをおっしゃっておりました。そういう持続可能性のある所に目をつけた、産業育成をしていかなければ、なかなか難しいと思います。ただ、問題は、個人の力では、限界がありますから、それをどうやってなりたせるか、その辺の方策を行政の方に考えていただき、方向性を示していただければと思うわけです。まあ、僕の持論ばっか言っても仕方ないんですけども、質問の時間ですから、質問しなきゃいけないんですけども。で、今、町、人口、出生率を大きく左右するのは、一見、自然減が圧倒的に・・・、この町においては多いもので、人口減少の大きな要因は、自然減だと、いうふうに理解されてるわけですが、人口学者に言わせると自然減の大きい要因は、女性数の・・・、出生数の減少だと。増田寛也さんが書いた地方消滅の根拠も女性数が減ってることを根拠にして、地方が消滅するというふうに結論づけているわけです。とすると、私たちの町が持続可能性を担保するには、子供を産む方、女性の方を多く招き入れるような、地域でなければいけないと考えるわけです。そうすると、それに必要な対応は、これも企画観光課長にお伺いしたいんですけども、どのようなことが、求められているのか、女性に親しまれる町とは、どんな町なのか、その辺を、個人的な見解で結構です。お願いいたします。

○企画観光課長（深澤準弥君） 今、おっしゃるとおりで増田レポートの最大の原因は出産適齢の方が、東京一極集中にいてしまうと、地方から吸い上げた、東京から行った独身の女性が、東京で、しかもキャリアを積むことによって、結婚もしない、子供も産まない、ということが、現象として挙げられました。そのおかげで日本全国地方が消滅しながら、最終的には日本も高齢化になって、子供がいなくて日本全国がそういう目にあうんだと、というのが彼のレポートだったと思います。松崎町で今おっしゃるように、合計特殊出生率につきましては、まずは、結婚する方々がいる、そして、子供を産んでいただくということで、出生率は上がって行くんですけども、今、おっしゃるように、その適齢の方々の数がやはりどんどん減っていく中では、それが難しい中に確立としては、少なくなっていくと思います。ただ、やはり、先ほども申し上げましたとおり、基礎となる人口が

減ってく中で、増やすとすれば、やっぱり関係人口とか、交流人口を増やす中でこちらに
関係する方を、いかに連れてこれるかということになってくるのかなと考えておりますの
で、例えば、昨日もあったワーケーションであったりとか、こちらで子育てをしたいと
か、町全体で、地域全体でいわゆる子育ての不安を払拭できるような地域であるとか、そ
ういったような施策ができることによって、やはり、子育てしやすいのが、いわゆる、お
金とか、そういった現物支給ではなく、育てる母親の方の精神的なフォローであったり、
地域の具体的な人たちの手を差し伸べる、エリアであったりというところが、やはり、好
まれるということは伺っております。いろんな全国あるんですけども、実際に、一番最
近、その子育ての関係で増えているところというのは、千葉の流山が一番やはり住みやす
いということで、数が増えてます。あそこは東京近郊ってこともありますので、そういう
意味では、移り住みやすいつてのはあると思います。あと、やはり、地方でやっているの
は、いわゆる園舎を持たない森の幼稚園っていうのがどこでも出ていまして、最近ではや
っぱり鳥取とか島根とか、そういったところとか、あと石川の方でもやっぱりありまし
て、全国森の幼稚園サミットみたいなのをやったりしてるようです。そこについては、本
当に子供を、いわゆる幼稚園・保育園とかの学習指導的のところ、プラスアルファでやは
り自然の中で自分で自ら考え行動するというような、生きる力を育むということを重点的
にやっているということでしたので、この松崎町の例えば幼稚園とか保育園というのは、
まさにそのものが森の幼稚園、川の幼稚園、海の幼稚園であるじゃないかと思いたすの
で、そういった所も含めて、アピールしていくことが必要かと思いたす。一つの要素で何
か解決できるって事は、なかなか難しいので、一つ一つの積み上げをやって行くのが、一
番のこれからの持続可能を目指すには必要かと思いたす。

○議長（藤井 要君） 渡辺議員、時間もありますので、配分しながら・・・。

○6番（渡辺文彦君） 時間延長お願いいたします。すいません、あと10分になったもの
で、これ以上やっていると後の質問ができないもので、とりあえずこの件に関して
は・・・。今、課長がおっしゃいましたようにね、地域の方々が子育てを支援する体制づ
くりっていうのがやっぱり非常に大切なのかなと思いたす。人口が世界的に増えてる
とこと減ってるところを見ると、経済的に豊かなところでなくて、文化的に豊かな所の方
が、人口の増加が、多いということです。この町も、経済的な事を、やっぱり最低限食わ
なくちゃいけないっていうか、経済的な担保をしなければいけないわけですけど、それ
に変わる、それにプラスアルファの心の豊かさとか、地域の共生しあう力とか、そういう

ものを育てるような方向性で、施策を打っていただければと思います。

ちょっと、時間が無くなりましたもので、2点目の方に、移らせていただきます。今回、絹屋の改修にあたって予算の事、僕、若干、触れているわけですが、これを触れた理由は、度々の延期の中で工事、追加的な工事が何度も行われてきたもので、本当にこれで、また、ないのか、これで大丈夫なのか、という念押しみたいな意味でもって、これを出させてもらっているわけですが、結局、少しずつ、手をかけることによって時間と余計なお金を使っていくのであれば、非常に非効率でありますもので、やっぱり、しっかりした計画を作っていただいて、無駄のない計画を作っていただきたいと思います。で、料金の問題なんですけども、今回、地域の方々の要望を受けて700円にするっていう方向ですが、そこは、基本的に千円でいいと思うんです。ただ、条件があります。それは、誰が見てもこの施設ならば千円でも良いよねという、施設であるべきなんです。今、地方において温泉施設はどこにもありますから、なかなかありふれた温泉施設では、お客さん見えられません。やっぱり特別な、差別化された施設でないと、お客さんは見えないと思います。だとするならば、千円いただいても十分、来るに値するよっていう施設にするのが僕は筋だと思っています。安かろう悪かろうでは、お客さんはいずれ遠のいてしまうというのが僕の考え方です。その辺に対して、今日、その担当の当事者の方も傍聴にみえられておりますもので、その辺に関してちょっと、町の考え方をお伺いしたいなと思いますけれど・・・。

- 企画観光課長（深澤準弥君） 今回の、今後出てきますけれど、料金の改定につきましてですが、まず、1つは議会の方からも、色々ご指摘があったように、予定されていた施設整備が全て終わっているわけではないということで、休憩所とかレストランっていうパーク構想の中での予定の部分がありまして、そこが、今回、予算とか、いろいろ事務を進める中で、大浴場だけをとりあえず、先に1つずつやっっていこうということになりました。その中で、当初の予定の中で、千円という金額を設定させて頂いていたと聞いておりますので、そういったところで、やはり、今、渡辺議員がおっしゃるように、千円に値する施設かどうかといったことを地元の方から指摘を受け、なおかつ、自分達と一緒にお客さんが観光客の方が入った時に、値段の違いを指摘された時に、自分たちは反論ができないと、いったようなことも含まれた中で、要望をいただいたものですから、その中での改定という方向を取らせて頂いております。金額につきましては、もう少し安く設定がっていうことも、幅を持たせていただいて要望いただいたんですけれども、その中で地域全体、

先ほど申し上げました通り、エリア全体の共存共栄を図る中で、少し上に山の家さんっていう露天のお風呂がございます。そこの方とも、いろいろ協議をさせていただいた中では、やはりその足を引っ張りあうのではなく、共存共栄ということで、やるのであれば協力するというようなお言葉もいただいております中で、やはり民間圧迫に値するようなことはすべきでは無いと、考えて今の金額を設定したものです。当然、観光客の町外の方は千円というのをちょっと下げさせていただいて、町民の方を300円、かじかの湯が300円だったものを今回400円に少しさせていただいた中ではですね、やはり施設が新しいということで、施設整備の部分も、町の人にもやはり少し負担していただく必要があるだろうってことと、山の家の方が、町内、町外ともに600円という数字が出ておまして、町外のお客さんばかりではないというようなことを地域の方々も社長からも言われまして、では、施設も投資されている中で、同じ300円ではなく、町内の方にも、少し負担をということで400円という設定をさせていただいたところでございます。

○6番（渡辺文彦君） 私は、今回のね、料金の見直し、700円になったということに対して、これはまた後の温泉施設の料金改定のところで議論できると思うんですけども、そのことに関しては別に、皆さんが合意して、進めていく中で、決まったことですから大いに結構な事だと思います。その、合意する過程の中で、地域の方々の参加があったという事を、僕は評価したいわけですね。地域が活性化していくっていうのは、地域の方の協力がなくては、不可能に近いとされた・・・そういうのが現実だと思ってます。パーク構想作成時、町民の方の意見を僕は・・・、大沢地区の住民の声をほとんど聞いた事がございません。僕は、パーク構想参加の時のワークショップに何回か参加しましたが、大沢地区、またあの周辺の方々ほとんどみえられてませんでした。ですから、本来ならばパーク構想の時に、住民の方々がうんと関心を持っていただければというふうな気持ちが凄くあったわけですけども、残念ながらなくてこうやって進んできて、現在に至っているわけですけども、ちょっと流れが変わったとしても、今、こうやって新たに、地域の方々が関心を持ってもらったということは、これから前へ進むにあたって大いなる灯火に、僕は、なるのかなと思うわけです。そういう意味で、もう時間が無いので、端的にお答え頂きたいんですけども、今後、地域の方々にどのような協力を改めて求めて行くのか、その辺に対してお答えをお願いいたします。

○企画観光課長（深澤準弥君） まず、一番最初にもお話があったとおり、施設が、地域の方々に愛される施設であるということを目指していきたいということが根底にあります。

その中で、今回地域の方々が、色々・・・、料金のことは1つのきっかけだったんですけれども、それで、こう・・・、まとまっていたいただいて、色んな要望を出していただきました。ただ、その時に、一番最初に要望をお持ちいただいた時に、一番心強かったのは、自分たちも一緒に、汗を流すからというようなお言葉を添えていただいたことで、自分たちも一緒にやるという方向が見えたのかなと思っております。どういったものを地域の方々に要望するかというと、元々ある地域のエリアのブラッシュアップというか、磨き上げというか、そういったことを一緒にやっていただけると一番よろしいかなと思います。あと、やはり、その予算の限られた中で、例えば施設の中の清掃であったり、もう実は、何回かやっていただいているんですけれども、周辺整備の環境整備であったり、今後まあ、景観計画等が策定されていく町の中で、やはり、あそこの大沢の明伏エリアの景観というのは、四季折々の顔を持つものですから、そういったものも含めた中で、やはり、あそこを歩く人たちが、ゴミ1つないような地域であるためには、そういうところこそ、地域の方の力が必要だと思っておりますので、行政の出来ることは限られる中で、地域の方のお力添えをいただきながら、あのエリアを活性化させていきたいというのが、これからの目標でございます。

○6番（渡辺文彦君） 残り1分となりましたので、まとめなければいけないんですけれども、地域の方々が今後参加していただかないと、人口がどんどん減って、税収が落ちていく中で、行政サービスがそんなに落ちていかないでしょうから、町ができる仕事の量というのは、限界が来ると思います。その中でもって、その地域の方々の協力が、やっぱり、今後、ますます求められていく時代になって来るのかと思います。そういう意味で、これを機に地域との協力関係ができ、また、他の地域にもそういう関係が波及できるような効果を持った対策をしていただければと思います。

今日2点ほど質問させていただいたわけですがけれども僕の基本的な・・・、今日言いたかった事は・・・、本来、質問ですから、質問しなきゃいけないんでしょうけども、僕は基本的にいつも自分の主張をしていますもので。僕の主張の根拠は、やっぱり地域を支えているのは住民であろうと、その為に、行政と住民はどのような形で関わっていくかってことを、やっぱりもっと模索すべきだろうっていうのが、今日の僕の結論であります。

どうも、ありがとうございました。

○議長（藤井 要君） 以上で渡辺文彦君の一般質問を終わります。

暫時休憩いたします。

(午前9時56分)
